京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（5 年計画の 2 年目）

1. 研究課題

ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義

French Symbolism as the Starting Point of the Post-human Era

2. 研究代表者氏名

森本淳生

Morimoto Atsuo

3. 研究期間

2021 年 4 月-2026 年 3 月(2 年目)

4. 研究目的

19 世紀を通じて大きな成長をとげた資本主義経済とテクノロジー、識字率の向上と出版・メディアの発展、第三共和政とともに決定的となった世俗化=脱キリスト教化は、社会と人々のメンタリティを決定的に規定すると同時に、こうした事態に対する批評意識を生み出した。フランス象徴主義はその端的な表現である。象徴主義者たちは、ブルジョア社会と産業資本主義に強い嫌悪感を示しているが、貨幣やテクノロジー、同時代の経済社会に対する考察は、その思索の本質的課題のひとつである。また、伝統的な信仰が成立しなくなった時代にあって「超越」との新たな関係が模索される。こうした社会や技術、宗教をめぐる省察を背景として、文学と芸術の新しい方式が、自由詩や内的独白をはじめとする様々な技法上の試みを通して追究されたが、そうした技法的変革も、自己の社会的規定性に対する批評意識によるものである以上、自己自身のあり方の変革を伴うものだった。詩人はたんに作品を書く人間ではなく、作品制作を通して自己の実存を変える者なのである。

現在、グローバル経済と金融資本主義が席巻し、新しいテクノロジーが社会を一変させているが、私たちはその恩恵を享受するとともに強い息苦しさを感じてもいる。伝統的な信仰は瀕死の状態だが、原理主義や新興宗教が勢いを持ち、他方で「世界の終焉」が強く感じられる中で、近代的な「人間」以後の生存のあり方が模索されてもいる。19 世紀後半に象徴主義が取り組んだ問題は、今日、こうしたポスト=ヒューマン時代を生きる私たちが直面する課題に通じる。その「起点」として象徴主義を複眼的に捉え直し現代を理解する示唆をえること、これが本研究の目的である。

The important factors in 19th century European development—capitalism and technology, literacy rates and publishing, secularization or de-Christianization made decisive with the advent of the Third Republic—not only determined the direction of modern society and

public thinking but also created a critical consciousness regarding that situation. French symbolism was its precise expression. Although the symbolists displayed hatred of bourgeois society and industrial capitalism, they regarded technology, finance and economics as essential themes of their reflection. And, in an age when traditional faith had lost its influence, they sought a new relationship with "transcendence." It is against this background concerning society, technology, and religion that symbolism pursued new modes of literature and the arts through various techniques, such as free verse and internal monologue. However, this technical revolution, because it resulted from a critical consciousness of the socially determined self, was inevitably accompanied by a revolution of the self; a poet is a person who not only writes a piece but changes his/her own existence through such production. Today, new technologies have radically changed the world, and the global economy, together with financial capitalism, dominate it. We enjoy their benefits but, at the same time, we feel greatly suffocated because of them. Although traditional faith is in its death throes, fundamentalisms and new cults are exerting growing influence. Feeling that "the end of the world" is near, we seek a new mode of existence which will come after the "human" in the modern sense. These problems we face in this post-human age share much with those that symbolism tackled in the second half of the 19th century. The purpose of this study is to reconsider symbolism from multiple perspectives as the "starting point" of the post-human era and to posit some suggestions that may allow us to understand our times.

5. 本年度の研究実施状況

令和 4 年度は研究報告会と訳読会を計 10 回開催した。報告会では昨年度にひきつづき、メンバーがそれぞれの研究テーマについて発表し知見の共有に努めた。具体的には象徴主義を、理論・音楽・演劇・経済・ジェンダー・終焉・日本での受容・リアリズムとの関連等から考察した。あわせて、人文研アカデミーの枠内でシンポジウム「ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義――『残酷物語』と『未来のイヴ』が現代に語りかけてくるもの」を開催し、社会還元に努めた。訳読会では、ギルの詩集『至善の生成（Le meilleur devenir）』を最終節まで読み進め、日本語訳と註解の作成を終えた。来年度にプロローグ・エピローグ部分の訳稿を作成し全体を整理した上で紀要等に発表する予定である。同書はフランスでも註解がほとんど存在せず、翻訳されるのも（英訳等も含め）世界初の試みである。企画している象徴主義に関する「読む事典」についてはいくつかの項目の執筆を開始し、具体化に向けて動き出している。

6. 本年度の研究実施内容

2022-05-07 「象徴主義研究」例会（8）　司会 森本淳生　フロベール、象徴主義とポスト・ヒューマン的思想--『聖アントワーヌの誘惑』を例に 発表者 橋本知子 千葉大学大学院人

文科学研究院
2022-05-08 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(4)　司会 森本淳生　発表者 山田広昭 東京大学大学院総合文化研究科　コメンテーター 森本淳生
2022-06-11 人文研アカデミー「ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義ーー『残酷物語』と『未来のイヴ』が現代に語りかけてくるもの」　司会 森本淳生　『残酷物語』を読むーー風刺と構成の美学 発表者 田上竜也 学習院大学文学部 『未来のイヴ』と／における超越 発表者 木元豊 武蔵大学　コメンテーター 中筋朋 人間・環境学研究科　コメンテーター 福田裕大 近畿大学国際学部　コメンテーター 野田農 早稲田大学創造理工学部
2022-07-23 「象徴主義研究」例会（9）　司会 森本淳生　象徴主義と経済――マラルメの／と経済 発表者 中畑寛之 神戸大学人文学研究科 独身者文学と「逸脱」の美学――象徴主義とジェンダー　発表者　熊谷謙介　神奈川大学国際日本学部
2022-07-24 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(5)　司会 森本淳生　発表者 岡本夢子 東京大学大学院人文社会系研究科　コメンテーター 野田農 早稲田大学創造理工学部
2022-10-08 「象徴主義研究」例会（10）　司会 森本淳生　象徴主義の終焉？ 発表者 藤野志織　象徴主義と理論の問題 発表者 森本淳生
2022-10-09 「象徴主義研究」例会（11）　司会 森本淳生　メーテルランク再考ーーその戯曲をめぐるいくつかの問題 発表者 坂巻康司 東北大学 象徴主義時代の美術と演劇の交差ーー制作座の挿絵入りプログラムを中心に 発表者 袴田紘代 国立西洋美術館
2022-12-10 「象徴主義研究」例会（12）　司会 森本淳生　大正期のポール・クローデル受容とフランス象徴主義の移入 発表者 学谷亮 中京大学 「前衛」としての象徴主義ー象徴主義の終焉を考えるために　発表者　久保昭博　関西学院大学
2022-12-11 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(6)　司会 森本淳生　発表者 福田裕大 近畿大学　コメンテーター 西村友樹雄 日本経済大学
2023-03-11 「象徴主義研究」例会（13）　司会 中筋朋 人間・環境学研究科 ランシエールの近代文学論とフランス象徴主義 発表者 森本淳生　象徴主義的理念の継承者としての音楽雑誌：La Revue musicale 誌（1920 ～ 40）とその先行雑誌について 発表者 西村友樹雄 日本経済大学
2023-03-12 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(7)　司会 森本淳生　発表者 中筋朋 人間・環境学研究科　司会 鳥山定嗣 名古屋大学

7. 共同研究会に関連した公表実績
・人文研アカデミー「ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義――『残酷物語』と『未来のイヴ』が現代に語りかけてくるもの」（2022 年 6 月 11 日）
・森本淳生／鳥山定嗣 「【翻訳】ジャン・モレアス「アニェス」（『情熱の巡礼者』所収）――翻訳と註解の試み」、「【翻訳】ジャン・モレアス「花の敷かれた道」（『情熱の巡礼者』所収）

――翻訳と註解の試み」、「【翻訳】ジャン・モレアス「追憶する騎士が語ったこと」(『情熱の巡礼者』所収)――翻訳と註解の試み」、日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」(https://www.paul-valery-japon.com/blog)

8. 研究班員

所内

森本淳生、藤野志織、藤貫裕

学内

村上祐二(文学研究科)、中筋朋(人間・環境学研究科)

学外

岡本夢子(東京大学大学院人文社会系研究科)、鳥山定嗣(名古屋大学大学院人文学研究科)、合田陽祐(山形大学社会文化システム研究科)、西村友樹雄(一橋大学言語社会研究科)、山田広昭(東京大学大学院総合文化研究科)、橋本知子(千葉大学大学院人文科学研究院)、坂巻康司(東北大学大学院国際文化研究科)、中野知律(一橋大学社会学研究科)、中畑寛之(神戸大学人文学研究科)、野田農(早稲田大学創造理工学部)、福田裕大(近畿大学国際学部)、熊谷謙介(神奈川大学国際日本学部)、久保昭博(関西学院大学文学部)、足立和彦(名城大学法学部法学科)、松浦菜美子(関西学院大学文学部)、大出敦(慶應義塾大学法学部)、立花史(早稲田大学)、フォコニエ、ブリス

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数(必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者(40歳未満)	若手研究者(35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者(40歳未満)	若手研究者(35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		8	0	8	4	1	37		16	16	3
		(2)		(4)	(3)		(20)		(11)	(11)	
国立大学		9		2	2		60		12	12	
		(3)		(2)	(2)		(25)		(12)	(12)	
公立大学		1					2				
		(1)					(2)				
私立大学		12		1			79		7		
		(1)		(1)			(7)		(7)		
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他 ※		1					1				
		(1)					(1)				
計	0	31	0	11	6	1	179	0	35	28	3
		(8)	(0)	(7)	(5)	(0)	(55)	(0)	(30)	(23)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合具体的な所属等名称を記載:例)高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要	その他:国立西洋美術館勤務										

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	0			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0			
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名（必須）	掲載論文数（必須）	掲載年月日（必須）	論文名（必須）	発表者名（必須）
1	仏文研究	1	R.4.10	Folie optique et fantaisie scientifique. Optogramme dans Claire Lenoir de Villiers de l'Isle-Adam	橋本知子
2	Stella	1	R.4.12	アンドレ・ジッドにおける反ロマン主義: 1920 年代の古典主義・ロマン主義論争	西村友樹雄
3	世界文学	1	R.4.6	ダンテとボードレールは比較可能なのか？ ― 19 世紀フランスの廃墟のアレゴリーに向けて	黒木朋興
4	"Une transparence du regard adéquat". Mélanges en l'honneur de Bertrand Marchal	1	R.5.1	Du roman familial à la poésie familiale – Autour de Don du poème et du Tombeau d'Anatole	熊谷謙介

5	人文研究	1	R.5.3	神経文学論（1）－ジャン・ロラン『フォカス氏』分析	熊谷謙介
6	Limitrophe	1	R.5.3	ネオ・ヒューマンは人間の夢を見るか？――ウエルベックにおける安楽死の誘惑と鎮静の技法	熊谷謙介
7	教養論叢	1	R.5.3	比喩と論理学――ポール・クローデルの日光体験	大出敦
8	仏蘭西学研究	1	R.4.6	ポール・クローデルと詩誌『詩洋』	学谷亮
9	Stella	1	R.4.12	滞日期ポール・クローデルの詩学における「空白」の概念：詩の存在論をめぐって	学谷亮
10	上海フランス租界への招待	1	R.5.2	文明か国家か――駐日フランス大使ポール・クローデルの中国観	学谷亮
11	プルーストと芸術	1	R.4.4	プルーストと料理芸術	中野知律
12	Stella	1	R.4.12	マドレーヌの風味：『失われた時を求めて』における想起の語り	中野知律
13	Stella	1	R.4.12	ゾラの『獣人』『ルルド』における鉄道の表象：風景・移動・知覚の観点から	野田農
14	仏文研究	1	R.4.10	出世主義者の到来―アルカンテール・ド・ブラーム『出世主義者』	岡本夢子
15	レアリスム再考	1	R.5.3	反ミメーシスとレアリスム―1920年代の文学と文学理論	久保昭博

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	**0**

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

14. 次年度の研究実施計画

令和５年度も基本的にこれまでと同様に、研究報告会と訳読会によって計 10 回の研究会を開催したい。報告会では、自由詩などの詩法、モレアス、ジャン・ロラン、プルースト等における象徴主義、政治や音楽、ロマン主義との関連などを取り上げる。訳読会はギルに一旦区切りをつけ、当時の代表的詩人であったアンリ・ド・レニエの『古のロマネスク詩集』を取り上げ、これまでと同様に日本語訳と註解を作成していく。レニエの散文は比較的翻訳があるが、詩の受容はきわめて限定的であり、この作業によって日本における彼の詩の理解が進むことが期待される。また、12 月 16 日には人文研アカデミー「催眠とアンドロイド――ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』をめぐるふたつの会話」を開催する予定である。「読む事典」については具体的な執筆作業を加速させていく。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

令和５年度には、ルネ・ギルの『至善の生成』について全体の整理を進め紀要等に発表する予定である。５年計画の３年目という中間地点であるので、「読む事典」や論文集等、最終成果の作成に向けて具体的な見通しを得られるよう鋭意努力していく。人文研アカデミー「催眠とアンドロイド――ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』をめぐるふたつの会話」を開催し、社会還元にも努めたい。